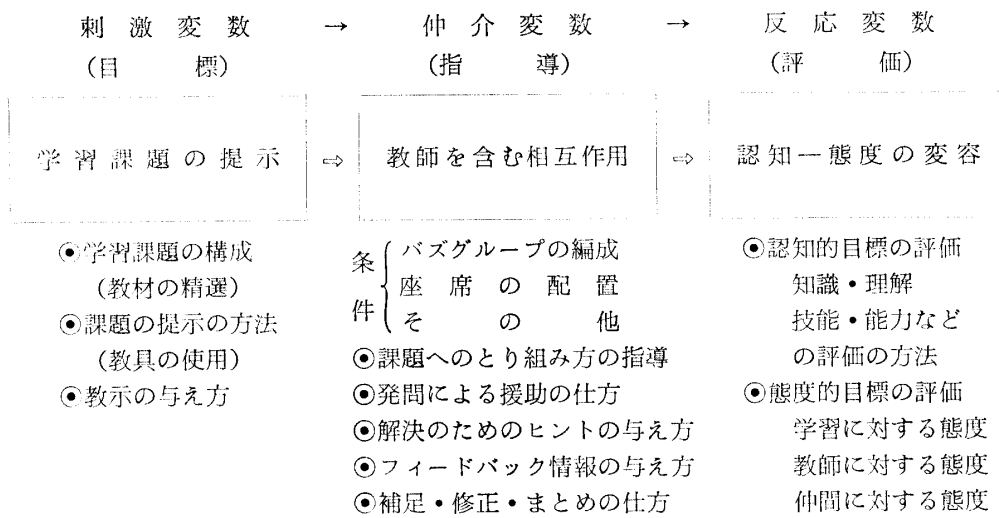


研究概況の報告 (1970年1月以降) 塩田芳久

1. バズ学習の実践的研究

この研究は、春日井市東部中学校との共同研究として、昨1969年4月から継続中のものである。その主要な狙いは、図示のようなバズ学習の基本的構想（理論的な

枠組）を実際の授業の中でいかに組立てていくかの問題を、いわゆる研究授業の繰返しとそのまとめとしての実験授業（ここではいわゆる教育実験的な手法が用いられる）を通じて実証的に解明していくことである。



この研究の1部は、近く「授業におけるバズの組織化」という主題で報告書にまとめられることになっている。

2. 学力診断のためのテスト・バッテリーの研究

この研究は、大橋正夫、小森孝彦との共同研究として昨1969年春から行なわれているものであるが、最近ようやくその前半の研究が終了したので、この紀要の中に報告してある。

前半の研究は、知能・学力・学習環境の3種のテスト・バッテリーの作成と、それによる診断方法の決定とにあったが、後半の研究では診断に基づく対策の問題を取りあげ、最終的な診断—治療・予防の総合的な Procedure を確立したいと考えている。

3. 学級集団の研究—学級の社会的構造の測定

この研究は、バズ学習に関する基礎的研究として、数年来継続的に実施している研究の1つである。ここでは学習集団としての望ましい学級のあり方を解明するための基礎として、その社会的構造の特質の測定に関する問題を取りあげた。すでにかかなりの資料を集めることができたので、近くまとめたいと考えている。

4. 集団課題解決に関する基礎的研究

この研究は、学習・社会研究グループの3年継続研究として、本年4月から発足したものである。本年度は文

献研究を主体とし、明年度以降に行なわれる予定の実験的研究の準備の段階である。

最近、1部の実験プラン（集団課題解決における課題変数の分析と対人認知論に基づく集団構造の測定に関するもの）がまとまりつつあるので、これらの仕上げを急ぎたいと考えている。

5. きょうだい関係に関する研究

この研究は、名古屋市家庭教育問題調査委員会の調査研究の1部として実施されたものであって、愛知教育大学の山本喜三らとの共同研究である。

ここで取りあげた問題は、(1)親の子どもに対する態度（とくに公平、不公平）、(2)家庭における子どもの役割分担が、(3)子どもものきょうだい関係（とくに、親和、対立）にどのような影響を及ぼしているか、という問題であった。研究の詳細は、すでに「きょうだい関係と家庭教育」昭和45年5月、名古屋市青少年問題協議会・名古屋市教育委員会、として報告書にまとめられている。